歴史総合-DX

**1913年①（大正2）第一次護憲運動・大正政変**

明治から大正に改まった前年の1912年（大正元）の年末に朝鮮半島に二個の陸軍師団を増やす問題で帝国議会が紛糾、「増師問題」は一転して大社会問題に発展した。官僚批判の急先峰で経済界に影響力を持つ銀座の「交詢社」（慶応義塾出身者の親睦クラブ）の有志が立ち上がり、福沢桃介（とうすけ、福沢諭吉の娘婿）の持ちかけにより、かつて長州藩が掲げた「尊王攘夷」のスローガ ンに匹敵する題目を考案、薩長閥の打倒を目指し「閥族打破憲政擁護」の8文字を採択して与党・立憲政友会の指導者を担いで国民運動の展開を開始し、ここに歴史に残る第一次憲政擁護運動が幕開けとなった。翌 1913年（大正2）2月には、護憲派の民衆が帝国議事堂を包囲して暴徒化し、軍人出身の第三次桂太郎内閣が総辞職に追い込まれ、国民が政権を初めて倒した「大正政変」が成り、政府弾劾演説を行った尾崎行雄は「憲政の神様」と呼ばれるようになった。同じ2月には海軍大将の山本権兵衛が立憲政友会の首班に指名されると、山本権兵衛の組閣（第一次山本内閣）に反発した尾崎行雄ら「立憲政友会」の議員26名が立憲政友会から離党して「政友倶楽部」を新たに結党し、尾崎行雄らが、政党に立脚しない山本権兵衛内閣を強く批判したことで、山本内閣は内務大臣に原敬（後の昭和期の首相）を起用し、大正デモクラシーの遠因だった「陸海軍の両大臣はそれぞれ現役の中将又は大将に限る」と規定されていたことによる「軍部大臣現役武官制」が撤廃されたが、現状は相変わらずだった。その後、国内の関心は中国に向けられ、日本政府は中国における第二革命を鎮圧した袁世凱の「中華民国」を10月に「支那共和国」と呼ぶことを閣議決定し、追われた孫文は日本に亡命することとなった。12月には、政友倶楽部の所属議員の一部はもとの立憲政友会に復党、その他の残りの議員が「亦楽会（えきらくかい）」と合同して「中正会」を結成、10 月に急死した桂太郎を支持した層が国民党から離れて新政党「立憲同志会」を立ち上げた。